死の棘

――映画文学人生論

原作：島尾敏雄　(1977年)　新潮社
監督：小栗康平　(1990)　『「死の刺」日記』（2008年）
出演：ミホ　松坂慶子　　脚本：小栗康平
トシオ　岸部一徳　　撮影：安藤庄平
伸一　松村武典　　音楽：細川俊夫
マヤ　近森有莉　　邦子　木内みどり

死の刺は罪なり、罪の力は律法なり

「おまえ、どうしても死ぬつもり？」
「おまえ、などと言ってもらいたくない。だれかとまちがえないでください」
「それなら名前を呼びますか」
「あなたはどこまで恥しらずなのでしょう。あたしの名前が平気で呼べるの。あなたさま、と言いなさい」
「あなたさま、どうしても死ぬつもりか」

島尾敏雄『死の刺』をはじめて読んだとき、この夫婦喧嘩のくだりで笑わされた。こんな会話は第三者からみればおかしいが、夫婦（小栗康平監督の映画では岸部一徳と松坂慶子）にとっては笑い事ではない。

喧嘩の原因は夫の浮気である。三日間無断外泊を続け、やっと家に帰ってきたところで、妻の心がキレてしまったのだ。

医師の診断によれば、心因性反応だというが、精神分裂病かもしれない。自殺するおそれもあるので、夫は妻から目が離せなくなった。浮気相手の女とは別れ、作家仲間とのつきあいもやめて、なるべく妻子と行動をともにすることにした。

壇一雄『火宅の人』の夫婦と比較すると、大違いだ。『死の刺』の主人公もそれまでは火宅の人だったのだが、悔い改めて、崩壊寸前家庭の火事の消火活動につとめるようになった。

死の棘 ――― 映画文学人生論

同じような状況で島尾敏雄が壇一雄のように妻子から逃げ出さなかったのはなぜだろう。原作と映画だけでなく、『「死の刺」日記』も読んでみた。これは島尾敏雄の死後十八年たってからミホ夫人によって刊行されたもので、「朝に夕べに祭壇の前に正座して、「御許へ召しませ」と、祈りを捧げる度に涙を零す悲愁の日々」とある。

日記の期間は昭和二十九年九月三十日から昭和三十年十二月三十一日まで。安岡章太郎、吉行淳之介、小島信夫、庄野潤三、遠藤周作などいわゆる第三の新人と呼ばれる作家たちが芥川賞を受賞して、続々と文壇に登場していた頃だ。島尾敏雄は「全くどん底の喪失の暗い中にいる」が、その才能は文学の専門家には注目されていた。

とはいえ、大衆向けの作品は書かないので、貧乏だった。昭和二十九年度確定申告で還付金三万五千円。推定所得は約三十五万円――当時のサラリーマンより多いが、壇一雄には遠く及ばない。そのような逆境が名作『死の刺』を産んだことになるが、この題名はいったいどういう意味か。

新約聖書「コリントの使徒への第一の手紙」第十五章には「死よ、おまえの棘は、どこにあるのか。死の棘は罪である。罪の力は律法である」という謎めいた詩句がある。島尾敏雄の小説と日記にはこの詩句の引用は見あたらない。

薔薇病んで死の棘深く突き刺さる